



# 教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana,  
Città del Vaticanoの転載許可済  
© 1995 発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

## キリストを迎える

★ もうすぐクリスマス、主の誕生を祝う日がやってきました。私たち全員、クリスマスに備えて、神の御子をすぐにご心持ちよく迎えようとする準備をしています。何と大いなる秘義を私たちはこの聖なる夜に追体験しようとするのでしよう！ 待降節のしめくくりにあたり、典礼が強調するのは、アダムが傷つけてしまったあの最初の調和を取り戻す御者が来られることを感じ取ったかのように、天地万物の喜ぶさまで、創造物はその御者が来て、創造主との完全な一致の状態に連れ戻してくださるのを待っているのです。みことばは人となり、万物の創造の秩序を

一新された天使パウロは告げています。(ローマ8・19、22、エフェソ1・10参照)

間近にせまったクリスマスは被造物全体の祝日ですが、まず第一に人間の祝日でもありません。来たるべき方は人類の贖い主であり、「父とその愛の秘義の啓示によって人間を人間自身に完全に示し、人間の高貴な召命を明らかにする」(現代世界憲章22番)御方だからです。神との友情を拒んだにも拘わらず、その人間の肉体をとられたイエズス・キリストは、全人類を神の似姿に戻し、罪によって破られた神との友情を取り戻させ、こうして人類を元通りに贖ってくださいます。全ての人

★ ベトレヘムでの出来事はいつ見ても喜びと光と愛に包まれています。この時期にはもつと親切と平和を實行しよう、悪を離れ、善に戻ろうという思いに自然と駆られます。あのつましい飼葉桶の中に、ヨセフ、マリア、そして全被造物が見守る傍らで、信者は一体何を探そうとするのでしょうか。人間は神を捜し求めます。神が人間を捜しておられることに気づいたからです。人間の心は神に出会い、神のもとにやすらうことを願います。聖アウグスティヌスが断言しているではありませんか。天の父はご自分のために人を造られ、私たちの心は神のもとに憩うまでやすらぎをおぼえることはない、と。

世に来るに当たり、贖い主。「恩寵と真理に満ちておられた」(ヨハネ1・14)永遠の輝かしい光に招き、信じる人々にその栄光を明かされます。「それは御独り子として御父から受けられた栄光であって、恩寵と真理に満ちておられた。」(同) 私たちは神の子なのです！ 子供たちに向けた手紙の中に書きましたが、「神は私たち全員を恩寵によって養子として迎えた」と望んでおられます。クリスマスが喜ばしい理由はそこにあります。：神の子となる福音を聞いて、嬉しくなる」のは当然でしょう。(家族年に当たっての子供たちへの手紙、1984)

クリスマスは、人とならしたみことばの秘義においてでなければ、人間の秘義は本当に明らかにはならない(現代世界憲章22番)と述べています。神の御子は「諸国民の光」としておいでになりました。それによって全ての人が真理である御子を知り、人生の本当の意味を悟り、心に宿った希望の揺るがぬ基礎を築くことができます。

★ クリスマスは、人となられた神の祝祭というだけではありません。家庭と生命の祝祭でもあるのです。「私たちがのために一人のみどり子が生まれ、子が与えられた。」(イザヤ9・5参照)一人の人間としてお生まれになった神の子は、全ての人間の誕生が持つ意味を浮き彫りにしてみせたのです。この世に生まれる全ての子供は、喜びをもってきます。それはまず両親の、次に家族の、そして全人類の喜びです。(ヨハネ16・21参照)(：)

最も大切な使命です。数々の脅威と危険に直面しながらも、家庭は教会と社会の基本となる細胞であり、私たち信者は新たな気持で責任を担わねばなりません。私たち全員がそれを求められています。揺りかごを前にして全ての家庭が人間の生命を、特にそれが弱く、無防備ならなおさら、守り、愛し、生命に仕えるよう求められ

ていることを強く感じています。神の子の託身と贖いは、教会の信仰の中心です。教会は「生命の福音」を地上の隅々まであらゆる人に宣言してやみません。(マルコ16・15参照) 教皇は子供たちの祈りに頼る愛する兄弟姉妹の皆さん。聖家族の模範に倣い、全

てのキリスト信者の家庭が信仰と祈りと人間性と真の喜びを学ぶ場となり、神を見つめ、その掟に心をとめますように。全ての人の心に刻まれたその掟は、救い主イエズス・キリストが完全な形で示されたものです。こうしてこそ、誰もが平和で生きがいのある未来を開くことができるのです。主はその使命を全ての人に委

ねられました。クリスマスに、とりわけ家庭と子供たちにその使命をお委ねになります。前にも言いましたが、教皇は子供たちの祈りを頼りにしており、平和のために祈ってくださるよう願っています。実に「愛と協調は平和を築き、憎しみと暴力は平和を壊す」のです。ここに集まりの方々とそのご家族の皆さんが、良きクリス

マスを迎えられますよう。そしてとりわけ、病に伏す人、苦しむ人、種々の理由で故郷を離れてクリスマスを迎えることを余儀なくされている全ての人々に、私の心からのご挨拶を送ります。教皇は祈りと愛のうちに彼らの傍らにいます。神の慰めを願い、合わせて私から特別の祝福を送ります。(九四・十二・二一)

# 心のとびらをたたたく神

(ローマ市内の大学を訪問されて)

(…)本日、教会は私たちに、預言者や旧約の民と共に見守り、祈り、待ち望めと呼びかけます。創世の最初の章にまでさかのぼる、救いの約束が成就されるからです。

クリスマスの夜は旧約で全人類に対してなされた救いが成就されます。新約の民である私たちは日々その約束が現実となるのを目のあたりにしています。それと同時に「存在」そのものである方、「後に来られる」べき御方(黙示録1・8参照)の到来をも体験しているのです。「息子よ、今日は私のぶどう畑へ行って働け。」(マテオ

21・28)今日の福音朗読で、たとえ話の父親が二人の息子に向かって言った言葉です。これが神の御言葉、そこには待降節特有の響きがあります。神の降臨は全宇宙に及び、大無辺で人知を越えています。待降節はまた、もっと正確に言えば、人間が動かすことのできるこの世界、「地に満ちて地を支配せよ」(創世1・28)という命令と共に、世の初めから神より委任されたこの世界のことでもあります。

ですからこの世は、創世主の計画によれば福音書の「ぶどう畑」に相当します。人類はそれ

を肝に銘じ、頭を働かせて耕さねばなりません。畑をつぶしてはなりません。この世は人類の受けた遺産であり、人間にとって本来の環境です。人類が世を破壊するなら、自らを避けられぬ死へと追い込むことになりま

## 神は人をご自分との命の交わりに招く

いま私は皆さんの大学にある全ての学部と施設を思い巡らせています。ここは「永遠の知恵」のぶどう畑、あらゆる次元に渡って見えるものから見えないものまで全被造物に刻み込まれた神の法のぶどう畑です。この学問研究の府を構成する皆さんは何らかの方法である父親の呼びかけに答えているのです。「ぶどう畑へ行って働け。」皆さんは福音書に描かれた二

人の兄弟のどちらに近いでしよう。兄のような応じ方でしょうか、それとも弟のような？ 弟は「はい、そうします」と言っただが行かず、兄の方は「行かない」と答えたけれどもあとで思い直して出かけていきました。(マテオ21・29-30)

「ぶどう畑」は人間とは別に存在するものですが、もっと深い意味を見ると人間のうちにあります。従って、人間は神の到来において特定の地位を占めていると言えましょう。一人ひとりが「私」として、神との生命の交わりに入ることができず、言葉にできないほどの秘密は、神が「あなた」として人間と向かい合うことです。人間にとって、創造主である神は契約の神となります。人間は旧約によって救いの約束を受け、新約はそれを全面的に実現しまし

た。この救いの実現こそキリスト：神であり人である御子、人間とは本当は何者であってその究極の運命は何か、何のため目に見えるこの世界に存在するかを明らかに示される方です。親愛なる皆さん、唯一で二つとない個性を持つ私たち一人ひとりを示すぶどう畑について、福音の真理を共に読むことができ、嬉しく思います。福音の光のもと、「ぶどう畑へ行って働け」という父親の言葉は特別な力強さを帯びてきます。私たち一人ひとりの「私」とは、御父が御独り子・ぶどうの木であるキリストにおいて耕したいと望んでおられるぶどう畑なのです。彼はぶどうの木、私たちは枝です。見方によれば、これこそ救いの現実の最も深い意味です。神はご自分を差し出されま

す。自らをお与えになります。

聖化する聖霊が私たちが神の本性にあずからせ、人はあの兄弟のようにあるいは「行かない」、あるいは「行きます」と答えることができるのです。神の訪れは、言わば人間の心一つにかかっています。

典礼暦年の待降節は、常に來たるべき方・「門の外に立って叩いている」(黙示録3・20)方がおられることを心に留める機会です。なんとすばらしい神なのでしょう。キリストにおいて到來なさる神は、全人類の歴史であると同時に私たち一人ひとりの歴史の一部でもあります。

同時に待降節は、良心を詳しく調べて自分はどう答えているかを問う機会を与えます。私は、「行きます」と答えて結局は行かなかった最初の息子に似ているだろうか、それともはじめは断つたが、思い直して出かけていった二番目に近いだろうか。(マテオ21・30)

待降節は教会の典礼暦の一角を占めるものですから、教会の存在と使命にもたえず関わっているはずで、公会議によれば「教会はキリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるしであり道具である」。(教会憲章1番)この教会とは新しい契約の民であり、救いの約束の成就

に招かれた人々の共同体です。また同時に、世を救うメシアの託身と変容に加わり、人類とこの世を神の本性にあずからせるため召されています。

和解の秘跡を受けて

キリストの到来に備える

教会はぶどう畑です。その使命はイエズス・キリストの力によって、このぶどう畑の中で果たされます。ぶどう畑は今や人間家族の受け継ぐ恵みです。それは全ての基礎となる秘跡です。教会の中で、信仰の諸秘跡を通して、全ての信者が聖霊に

よって生まれ変わり、清められる過程が完了します。愛する皆さん、どうかこの待降節が私たちにとって再生の時、秘跡による聖化の時となりますように。典礼は和解の秘跡を受けよと勧めています。この秘跡を通して、聖体のうちにましますキリストを迎える準備をすることができまますように。一人ひとりの心の扉を叩くキリストを迎え入れることができまますように。救いの現実、契約の神の生命にあずかることのみならず、同じ神が親しく人間の中心に住まわれることでもあると悟

あなたたちは未来の希望

最後になりましたが、新年も近づいたこのクリスマス前の季節にちなみ、心からお願ひしたいのは、希望のことです。若者の皆さんは希望そのものです！ローマ教皇としての任務の初めから言っていたように、皆さんが希望です。なぜなら皆さんは若いから、未来が開けているからです。皆さん個人の未来だけ

でなく全世界の、様々な共同体の未来だからです。希望とは待降節の精神であると言えましよう。典礼用語で言うなら待降節は「強い時」ですが、まず第一に希望の時でもあるのです。私たちは未来に、「マラナ・タ」(御国が来ますように)の歌が典礼の中で成就するその日に目を向けます。それだけでなく、さらに神と人との秘義の新たな実現に目を向けます。それはクリスマスに成就した秘義、神が人を高め、人となられたという秘義なのです。(…)

(九二・十二・十五)

信徒の靈性はキリストに由来する

教会シリーズ 30

1 信徒は教会の中で特別な役割を担っています

それを果たすためには靈的生活を大切にしなければなりません。靈的生活を送る助けになるように、洗礼を受けたものは誰もが聖性に招かれているという考えに基づいて、信徒の靈性についての神学上、司牧上の著作が出版されています。この招きに答える道は、個々の人の召

命、職業、生活条件、能力、傾向によって様々ですし、靈的・使徒的指導や修道会・宗教団体の創始者に対する個人的好みによっても異なります。それは今までもこれからも、教会の一員として天国への旅路をたどる全ての団体に共通することです。第二バチカン公会議も教会内の全ての人に通用する生き方について述べる中で、信徒に固有な

2

全てのキリスト信者の靈性はご自分との生き生きとした一致を必要とするというイエズスの言葉に基づかねばなりません。「私にとどまれ。私がその人の内にいるように私にとどまる者は多くの実を結びます。」(ヨハネ15・5)このように聖書は、キリストとの一致に關してとても重要な二つの観点を示しています。一つはキリストが私たちの中におられるということ。このことを私たちは心から感謝して受け入れ、認め、切望しなければなりません。これを体験した時、心は喜びで満たされます。もう一つは

キリストの中に私たちがいるということ。これは信仰と愛を通して実現するでしょう。キリストとの一致は聖霊の賜です。聖霊が靈魂に一致の賜を注いでくださるのです。神の秘義を黙想し、その光を伝えるため個人的・社会的な使徒職活動を行なう中で、靈魂は賜を受けて満たされます。(聖トマス・アクイナス「神学大全」II-II, q. 84) 信徒も神の民を構成する他の人々同様、この交わりを招かれています。「信徒は日常生活における世間の務めを正しく果たし、キリストとの一致を自分の生活から切り離すことはない。」(信徒使徒職に關

# 不変の教え

する教令4番)

## 信徒は祈りから力を得る

### 3

キリストとの一致は聖霊の賜ですから、祈りの中で求めなければなりません。神のご意志にそって働く時、確かに主をお喜ばせることができます。これが祈りの形です。どんな小さな行ないでも、神をたたえ、お喜ばせる捧げものとなります。しかしそれだけでは十分でないことも事実です。各瞬間を祈りに変えなければなりません。ちょうどイエズスが、救い主としての活動に専念する最中にも祈りのため引きこもられたように。(ルカ5・16)

これは全ての人に、従って信徒にも当てはまることです。「立ち止って」祈る方法はさまざまです。しかしどんな場合でも、個人生活であれ使徒職においてであれ、祈りは欠かせません。祈りの生活を通してのみ、信徒は霊性、活力、困難や障害に直面したときの勇氣、落ち着き、イニシアチブを発揮する能力、忍耐力、回復力を得ることができます。

### 4

信徒を含めて全ての信者が送るべき祈りの生活とは、典礼に参加し、赦しの秘跡を大切にし、そして何よりも聖体を賛美することです。聖体の

秘跡でのキリストとの一致は「私の肉を食べ私の血を飲み者は私に宿り、私もまたその者のうちに宿る」(ヨハネ6・56)と言われたように、キリストと霊魂との互いの内在の源となります。聖体の晩餐にあずかれば、霊的な食物を得て多くの実を結ぶことができます。信徒も聖体を中心にした自身の濃い生活に招かれています。日曜日のミサで聖体の秘跡にあずかれば、それが霊的生活と使徒職の源となるでしょう。幸いなものは、日曜のミサと聖体に加え

てもつとひんばんに聖体を拝領したいという望みに駆られていく人々です。多くの聖人たちはそれを勧めています。信徒の使徒職がさらに拡大しつつある現代では特に大切なことです。完全にキリストを見出す

### 5

キリストとの一致は地上の生活のあらゆる場面に関わり得る、いや関わりなげばならないと公会議は信徒に呼びかけています。「家庭の仕事も他の仕事も、決して霊的生活と無関係なものではなく、「あなたたちが言葉と行ないをもつて行なうことは全て、主イエズス・キリストの名によって行ない、主によって父である神に感謝しなさい」(コロサイ3・

17)と使徒聖パウロが述べているとおりである。」(信徒使徒職に関する教令4番)人間のあらゆる活動はキリストにおいて深い意味を持ち得ます。それによって地上の事物の価値に、広くはつきりした展望が開けるのです。全て存在するもの、行動するものを持つ肯定的な性格を神学は強調してきました。万物は「天地の創造主」すなわち全宇宙と大小を問わず宇宙を構成する全てのものの主である神の存在と真・善・美にあずかっているからです。これは聖トマス

が示した宇宙観の基本論理の一つです。「神学大全」I, q.6, a.4; q.16, a.6; q.18, a.4; q.103, a.5; q.105, a.5, etc.) 聖トマスは創世の書と聖書の他の多くの箇所を論拠にしました。それは小宇宙や大宇宙に関する研究の輝かしい成果によって科学的に広く確認されています。全てに始まりがあり、それぞれが能力に応じて動き、限界を持ち、依存し、最後を迎えるということなど。

## 十字架は喜びに通じる

6 この世の物事についての正しい認識に基づいた霊性、無限で永遠の神に向かい、生涯を通して神を求め、愛し、仕える霊性は、世界と歴史の出来事を照らす光であることがわ

かります。いわゆる「現世」と呼ばれるものの中にもキリストが現存しておられることを理解させてくれます。これは信仰と希望によって、神との関係の中で見い出すことです。私たちは神の中に「生き、働き、存在する」(使徒行録17・28、信徒使徒職に関する教令4番)ものな

のです。信仰によって、神の救いという愛の計画の実現を認めることができますし、一人ひとりの生活の中で、イエズスがお示しになった御父の絶え間ない心づかい、人間の願いや必要に答えてくださる神の摂理の働き(マテオ6・25、34参照)を見い出すことができるのです。信徒として、このような信仰があれば日常生活の中の善と悪、喜びと悲しみ、労働と休息、観想と行動に正しい光が投げられるでしょう。

### 7

信仰が新鮮な見方をもたらし、希望がこの世のこととがらに従事するエネルギーを与えます。(信徒使徒職に関する教令4番参照) 信徒は、霊的生活と使徒職がこの世の事柄の完成を停滞させるものではないことを証明し、目指すゴールとそれを支える希望がいかに大きいかを示し、それを人々に伝えようとしています。困難と悲しみが伴うかもしれませんが、誰も失

望させない希望です。なぜならそれは過越の秘義、キリストの十字架と復活の秘義に基づいているからです。十字架の犠牲にあずかることは、栄光のうちにキリストが宣言された喜びにあずかることだと信徒は知り、証言します。こうして、外面的・現世的なものにも永遠の生命に至るための手段及び道としての正しい目的があることを知りつつそれらに接する人は誰でも、この世の物事にひそむ内なる確かさを見て取ることができるのです。それは聖霊が注いでくださる愛によるものです。(ローマ5・5参照) 聖霊は地上においても神の命にあずからせてくださるのです。(九三・十二・一)

## 「教皇様の声」購読者募集中

「教皇様の声」をご覧になって、興味をお持ちになった方、少し読んでみようかと思われた方、どうぞ下記までご連絡ください。折り返し見本紙とご購読案内をお送りします。また、お知り合いの方にもご紹介いただければ幸いです。

(財) 精道教育促進協会  
〒659 芦屋市船戸町12-6  
Tel. 0797-31-3452 Fax. 0797-31-3448

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教 書簡、講義等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部一八〇円(送料込み) 一年予約 一部二〇五〇円(送料込み) 詳しくは精道教育促進協会まで。

郵便振替  
01130-  
8-72393